HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	記憶力と直観 : ベルクソン哲学における隠された「論理」について
Author(s)	川端, 繁之
Citation	哲学, 41, 103-120
Issue Date	2005-07-17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35034
Type	departmental bulletin paper
File Information	41_RP103-120.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学哲学会『哲学』41号（2005年７月）

記憶力と直観 ―ベルクソン哲学における隠された「論理」について―

川端　繁之

1.「私自身にとって自分ほど近いものがありましょうか」と尋ねたアウグスチヌスは、そのすぐ前で、「私にとって、まさにこの自分自身が、多くの困難と汗を要する畑となってしまったのです」(1)と告白している。多くの哲学者たちが自己に対する自己の現前という事態に注目してきた。或る者は魂においてイデアの想起を見いだし、現世超越の証拠とし、また或る者は魂において神の似姿としての内なる三位一体を求めた。或る者はコギトの明証の中で「あること」と「知ること」との揺るぎない一致の場所を、また或る者は内官にそなわる時間という直観形式の壁によって隔てられた、自己と自己との非同一性を、また或る者はそれをさらに踏み越えようとして同一性と非同一性の同一性を語った。

「自己意識の哲学」とも言うべき系譜が存在している。そして自己が自己に現前するというこの事態の中にはさまざまな観念連関がしみ込んでいる。われわれの哲学者もこの自己意識の哲学の系譜に属すると言ってよいだろう。しかし、過去において自己意識へのかくも多くの定位がなされたことを知ったとき、私は次のような疑問を抑えることができない。「自己意識の哲学者たちが示した概念史に、われわれの哲学者である、ベルクソンは、これ以上一体何を付け加えようというのだろうか?」この問いはわれわれをベルクソン哲学の誕生の地に導くことになる。

2. この問いの答えを『意識の直接所与についての試論』（以後『試論』と略記）に、まずは求めよう。われわれは日常的に自己を認知する。しかし、ベルクソンによれば、この日常的認知は「純粋」なものではなく、独特の屈折の産物であるという。その屈折とは物事を空間化して捉えようとする、いわば人間知性の「本能」である。カントにおいて直観形式が、物自体とわれわれとを隔てていたのと同様に、ベルクソンにおいては等質的空間が、物とわれわれとを隔てる。そのように屈折の正体を見極めた彼は、日常的意識に加えられたこの屈折を浄化する。それによって彼は根源的な意識状態を見いだし、それを純粋持続と名づけたのであった。

「純粋持続とは自我が生きることに身をまかせ、現在の状態とそれに先行する諸状態とのあいだに境界を設けることを差しひかえる場合に意識の諸状態のとる形式(la forme)」(2)であり、その状態はさらに「諸要素の相互浸透、連携、内面的有機化」(3)とベルクソンは規定している。そして彼は、人間の自由にまつわるさまざまな幻想的観念を批判しつつ人間の自由に場所を与えようとした。そこにおいて「私は信仰に場所を獲得するために、知識を放棄しなければならなかった」(4)と言った、あのケーニヒスベルクの哲人の余影を見ることもできよう。

自己意識の哲学の代表者であるデカルトにおいては、自己の現前は真理の基準と存在論的カテゴリーの開示の場所であった。その意味では、自己「意識」と自己「認識」との明確な区別を立てるカントを自己意識の哲学者と呼ぶことには抵抗があるかも知れない。周知のごとく、カントは自己と自己の間に直観形式としての時間という衝立てを立てた訳だが、これによって現象と物自体の区別が生じることになった。そしてベルクソンはこの直観形式としての時間を取り除き、自己と自己との隔て、世界と世界との隔てを取り除く。その根拠は、カントの言う時間は「本当の」時間ではないということにある。カントの言う時間は空間化された時間であり、それは純粋持続と呼ばれた根源的時間と「無限分割可能性の図式」(5)としての空間との混合体なのであるとされる。そしてカントにおいては直観形式としての時間は現象一般の根本形式であった。したがって、直観形式としての時間をこうした仕方で打破することは、自己と世界の経験

の捉え方に大きな変化をもたらすことになる。

現象界と物自体の区別は、そもそもアンチノミーの解決のために要求されたものだった。そしてアンチノミーとは「完結した無限が与えられている」という想念から生まれた矛盾であった。ベルクソン自身はアンチノミーそのものに対して具体的に分析を加えてはいないが、彼の空間化批判は、この想念に達する射程をもつものである。「完結した無限」の底には、無限を含んだ全体として「無限分割可能な空間図式」が潜んでいる。そしてこの図式は、外的事物の支配という実利的要求に基づいたもので、物そのものというよりは、外的事物に対する人間の関心を映したものであるとされる。したがって、純粋持続への還帰とは、「自己に対しても世界に対しても、実利的関心から浄化された視線を向け、直接的な時間経験の中に自己と世界両方の原初的な存在を見て取ろうとすること」と言えよう。そしてこのことは同時に、不可知論と批判によって病み衰えてしまった近代哲学がもともともっていた、存在論へのたくましい熱望を呼び覚ますことでもあった。

3. デカルトは「われ思うゆえにわれあり」という自己意識の事実、すなわち「知ること」と「あること」との揺るぎなき一致の中から、明晰・判明という真理の基準を取りだし、この一致に対して実体と属性といういささか古色蒼然としたカテゴリーをあてがった。この実体・属性というカテゴリーは数ある存在者の中の一つである「心」のあり方を規定するためにだけ呼び出されたものではない。自己意識においては、「知る」と「ある」とが不可分離的に一致している。ここで示される「知る」は「ある」に対して偶然的な「知る」ではない。この意味で自己意識は存在の意味がもっとも明確に露呈する場所なのであり、それゆえに、ここで確定されたカテゴリーは存在論的優位をもっているとされたのである。

デカルトが自己意識において瞬間性を見いだしたのと対照的に、ベルクソンは自己意識において純粋持続という存在

様態を見いだした。しかし、『試論』の中での彼は純粋持続の指摘と自由の擁護に忙しく、その結果、自己意識という次元がもっている、「知る」と「ある」との揺るぎない一致そのものの解明が十分でないように思う。ベルクソンにおけるこの「一致問題」に光をあてるために、『形而上学入門』（以下『入門』と略記）へと移行することとしよう。

4．ベルクソンは『入門』においてわれわれが物を知る仕方を二つに区分した。一つは対象を外から知ること、すなわち分析であり、もう一つは対象を内から知ること、直観である。そして「内部から直観によってわれわれのすべてがとらえる実在が少なくとも一つは存在する。それは…（中略）…持続しているわれわれ自身の自我である」(6)と彼は言う。ここにおいて純粋持続と直観が結びつけられ、そしてさらに「意識とは記憶力を意味している(conscience signifie memoire.)」(7)という決定的な規定が提示される。

したがって、「知る」と「ある」との揺るぎない一致は、直観と記憶力との一致として定式化される。デカルトにおいては、「知ること」と「あること」、明晰・判明、思惟する我、実体・属性が一体となっていた。しかし、ベルクソンが見ているものは、記憶力という現在と過去との不断の浸透である。それは明晰でも判明でもない。むしろ現前と非現前の共存、過去と現在のきっぱりとした区別を立てることができない相互浸透である。

このように比較してみると決定的なことがわかる。それは、デカルトにあった存在論的カテゴリーがベルクソンにおいて欠けているということだ。私の考えでは、ベルクソンは自分自身が描き出した原事実にふさわしいカテゴリーを提示していない。それどころかそもそもここにカテゴリー問題があるということ自体に彼は気づいていないのではと私は疑っている。そしてこのカテゴリー問題への無自覚が彼の著作の難解さを引き起こしている主因であると思うのだ。この問題を打開しよう。考察されなければならないのは、「記憶力と直観との複合態」である。

5. 記憶力とは「未来を目指しての過去と現在の総合」(8)とされる。そうすると記憶力を直観するという事態は、過去と現在の総合の直観と言い換えることができる。ここでわれわれはカントが構想力について述べたことを想起してもよいかも知れない。カントによれば、構想力は、総合一般にかかわるもので、魂の、不可欠とはいえ盲目的な機能である。それは、すべての認識の条件であり、そして悟性は構想力の総合を概念にもたらすことによってわれわれに認識を与える(9)。現前しない対象を表象する能力、盲目的な総合としての構想力は、ベルクソンの言う記憶力に似ている。しかし、単なる記憶力、単なる構想力ならば、それは単に「あること」、「魂の盲目的機能」への埋没を示すに過ぎない。ここで見て取られているのは直観という形であっても何らかの「知」と結びついている「記憶力」であり、概念へともたらされうることが可能であるところの「構想力の総合」である。かつてヘーゲルによって「真理の故郷」(10)と呼ばれたこともあった、あの場所である。

6. 「記憶力の直観」は「過去と現在の総合の直観」であるとされた。自己意識は過去と現在が相互浸透するのを見る場所である。この原事実を存在論的カテゴリーにまで昇華させなければならない。デカルトが自己意識に対して与えた実体・属性というカテゴリーは、「知ること」と「あること」との不可分離を示していた。しかし、この実体というカテゴリーは、歴史が示す通り、イギリス経験論によって攻撃され、またカントによってその自己意識への適用はパラロギスムスであるとして斥けられた。どうやら「記憶力と直観との複合態」にたいして、実体・属性のカテゴリーをあてがうことは望み薄なようである。

そこで私は対をなす二つの語に注目したい。それは潜在的なもの(le virtuel、以下Vと略記することがある)と顕在的なもの(l'actuel、以下Aと略記することがある)という語である。これらの語はもちろんベルクソンによって使用されているものだが、私の見るところ彼の言語系の中でこれらの語の占める位置価は、必ずしも明確ではない。物質、記憶

力、生の飛躍等々のような印象的な語に比べてそれらの語がどのように機能しているのか、見えにくいのである。副次的な位置づけしかない用語を前面に出すことは、恣意的な解釈の嫌疑を引き起こすかも知れない。しかしながら、私の意図はこれらの語すなわち潜在的なものと顕在的なものという語に注目することによって彼の言語系の重力場の中心をあえてずらし、ベルクソンの隠された「論理」を白日のもとに曝すことにある。この「恣意」の適否が考察の結果によって判定されることを望む（顕在性、潜在性という二つの概念が考察の中心に躍り出たことに対して、もう少し付言しておきたい。『物質と記憶力』の中でのベルクソンの議論を解説するあたって、普通、純粋知覚、純粋記憶という二つの用語をめぐってそれらそれぞれの規定と相互関係を論ずるという方策が取られることが多い。しかし、こうした方策ではベルクソンが『物質と記憶力』第一章で提示したイマージュ概念の妙味を捉えることは難しい。記憶を排除し、権利上想定された純粋知覚は、一般に、何か一枚岩的なものとして考えられてはいないだろうか。純粋知覚ですら二重性をもっているということ、（比喩になるが）波立つ水面を水の盛り上がりであるとともに、空気のへこみとも見ることができる、そうした二重性が純粋知覚においてすでに成り立っていることに気がつけば純粋知覚をめぐる議論の錯綜は、解消される。潜在―顕在という語は、そうした二重性を示すものであり、純粋知覚―純粋記憶の双方に共通の存在構造を記述するものである。また潜在性を強調することがベルクソンにおいて、存在概念の拡張の試みとして提起されたということもベルクソンの読者にとっては明らかなことであろう。さらにもう一言付け加えたい。『物質と記憶力』の思想は二元論であると言われるが、こうした常識的解釈に頼っていては、この著作の理解には届かないであろう。この著作のポイントは「分けることによって統一する」ということにある。この難題に対する答えが「顕在―潜在」の強調なのである。）。

現在を顕在に過去を潜在に置き換える。するとさきほどの定式は「潜在と顕在との総合の直観」となる。こうした置き換えが恣意的なものでないということは、『物質と記憶力』の中での用法から立証できる(11)が、ここではいちいち挙

証しない（注を参照されたい）。過去が現在に浸透するということは、顕在的なものが常に潜在的なものにつきまとわれているということである。顕在なき潜在はなく、潜在なき顕在はない（われわれが物を見るとき、その見られた物は、無前提な直接所与ではない。潜在なき顕在はないのであるから、この顕在的なものは縁暈(la frange)としての潜在的なものに取り囲まれている。Ch.S.パースは、『人間に対して要求されている諸能力に関する諸問題』という論文において、われわれの認識が先行する認識に影響されていることをさまざまな例を挙げて示した(12)。彼はそこでチャイニーズ・リングというマジックに言及して、マジックを見物している人が多くの暗黙の推論を実行しているかを指摘している。われわれ自身の経験を少し反省してみるだけでこのことに思い当たる節はいくらでもあるだろう。われわれは、顕在的なものそのものを見ていたのではなく、顕在的なものにおいて潜在的なものを見ていたのであり、そして顕在的なものと潜在的なものとの間に形成される傾きや動き、すなわち意味を感じ取っている）。そしてこの二項態は自己意識という原事実において見届けられるのであるから、「知ること」と「あること」とが不可分に合一している、つまり直観される。あるものがそれだけで「ある」にとどまらず、常に他のものを引き寄せて「ある」こと、そしてそれが知られて「ある」ということ、こうした「ある」にまつわる複合的全体を呼ぶ適切な呼称は、「意味する」という言葉しかないのではないだろうか。顕在と潜在と直観との三項態は意味作用の原型であり、記号としての存在様態を示しているのだと捉えたい。純粋持続する自我はすでに見たように絶えざる変化であり、顕在―潜在がつくりだす二重性は絶えず動く過程的なものである。そうした不断の動性を帯びた記号としての存在様態を、私は「記号過程」(semiotic process)と呼ぼう。

すでに述べたように、自己意識は存在の意味がくもりなく開示されるはずの場所であった。ここまででわれわれは、ベルクソンが定位した場所が「記号過程としての自己意識」であることを（おそらくベルクソンの意図を超えて?）見いだした。そして自己意識を存在論への通路とする戦略を受け入れている。したがって、私はここから存在者の存在へ

と帰向し、存在一般を記号過程として描出しなければならないであろう。しかしながら、今回はベルクソンの思考の中に隠された記号過程を追求するのが主たる目的であるので、今しばらく人間の領域にとどまることとする。

7.『入門』によれば、記憶力の直観はイマージュによっても言葉によっても表現できないものであった。記憶力と直観との複合態は、あらゆる媒介を欠いた空虚な場所のように見える。この虚ろな場所はいったい何なのか。そのような複合態の追求は、或る意味では魂という文字を読むことに似ている。そしてそれはいまのところ判読困難な謎の文字である。しかしながら、「その同じ文字がどこか別のところにも、もっと大きくもっと大きな場所に書かれているのに気づいたとしたらどうであろう」(13)。不可視で支配者的なものであると言われることもあった魂を解読する道が、その大きな文字を読むことによって開けるのではないか。

現在の中に浸透しようとする、このような記憶力の働きをより具体的に知るために『物質と記憶力』へと移行しよう。ベルクソンは記憶力の形態を二つに分ける。そして彼はこのことを再認（再認とは、「過去を現在の中で把握し直す具体的な行為」(14)である）障害の事実によって確証する。

まず彼の記憶力(mémoire)の二形態説を概観しよう。一つ目の記憶力の形態は、運動的な記憶力で、現在に密着してただちに現実の運動に転化しようとする。二つ目の記憶力は、表象的な記憶力で、現実から遊離した夢のような性格をもち、個人的記憶(souvenir)として日付をもつ。例えば、ひとは学課を暗記する場合、何度も反復し、それを自分の身体に定着させようとする。これが運動的記憶(souvenir)である。しかし、同時に暗記に向けた一つ一つの試行が、（一回限りのものとして日付をもった）独自な記憶として残存しなければ定着の努力はそもそも不可能であろう。表象的記憶(souvenir)がこれにあたる。

運動的記憶は本能のようにもともとそなわっているものではなく、新しい運動習慣として努力を通して形成されるものである。運動的記憶を運動的記憶として認知し、それに向かって努力し形成しようとすること自体、人間が身体の中

に埋没した存在では「すでにない」ことを示している。身体「について」語りうる存在者は身体を超えているのでなければならない。

8. 彼は以上の記憶力の二形態説の裏づけを求めて、失認・失語という再認障害の検討を始める。まず彼は失認型の再認障害を検討し、「われわれの再認にはすべて運動的反応ないし運動的記憶がともない、それが知覚と記憶とを媒介する」という結論に達した。記号過程的に言うならば、すべての再認は顕在(l'actuel, 以下Aと略記)―媒介(le m dium, 以下Mと略記)―潜在(le virtuel, 以下Vと略記)という三項態的構造をもっているということである。

次にベルクソンは失語の検討に取りかかる。ベルクソンにおいては失語は失認の一種として取り扱われており、したがって、さらに失語を論じるのは、よけいな重複であるように見える。しかし、失語の事例は失認とは違った優位性をもつ。なぜなら、言語の聴覚的理解は「注意力のあらゆる段階を通って、記憶力のもつ多くの継起的可能性」(15)を示すからである。議論の領域を有節言語の聴覚的再認に絞ることは、その聴覚への限定のゆえに、一見失認に比べてスコープが狭くなったように見えるが、その重要性は格別である。有節言語の聴覚的再認という、この事例は、記憶力との関連で見た場合、狭いどころか、むしろ記憶力の諸々の可能性の発揮とその外化された姿で見届けることを可能にする包括的な事例なのである。われわれは不可視の魂の働きを見ようとして外的知覚の領域に移動したのであるから、この事例はわれわれにとって好都合であろう。

失語の検討の結論も同じである。聴覚的言語の再認の場合も運動反応が見て取れる。この媒介者のあり方はさらに分節され、「運動図式」という名が与えられる。運動図式とは何か。話された日本語の言葉をただの音として聞くことは不可能に近い。それでは自分のまったく知らない外国語を話す集団の中に一人とり残されたときはどうであろうか。聞こえてくるものはすべて人間の発する音波であるが、意味を荷なうべき語としては聞こえてこない。感覚失語の患者のおかれた状況は、これに類似している。彼には自分の母国語が未知の外国語のように聞こえている。この患者には何が

欠如しているのだろうか。ベルクソンは言語音の知覚には「聞き取った語句を分解したりその主要な分節を表示する力のある生まれつつある運動」(16)が伴っており、それが「現在の知覚の物質性」(17)を変化させると言う。それは言語音に関して「聴取された言葉の顕著な特徴の内的反復」(18)を生じさせるものであり、彼はこれを運動図式と呼ぶ。

運動図式は聞き取った音声の模倣の結果できるものであるが、一度に完成するものではない。運動図式は反復によって、「分解…（中略）…再構成」(19)によって、「身体の知性」(20)が作り出すものである。そのようにして身体の知性は「分類、分割」(21)し、「何が本質的であるか」(22)を強調する。身体の知性の産物であるとされた運動図式は、単に言語音の再認だけにとどまらない広がりをもつ。彼は草食動物が草を弁別すること、それに引き寄せられる事例を挙げているが(23)、そのとき草食動物は草一般（草の図式と言ってもよいだろう）を認知しているのだと彼はいう。しかし、それは概念として「思考されて」いるわけではない。一般に図式は、身体による暗黙知であり、「感ぜられ、被られる」(24)概念である。ここにおいてわれわれは、「体験されたもの」と「考えられたもの」との未だ分化されざる抱合を見て取ることができよう。この意味で、まさに概念は思考された図式であり、図式は体験された概念なのである。

「感ぜられ、被られる」概念としての図式はなるほど身体に埋没してはいるが、しかし固定的なものではない。それはそれなりにかなりの柔軟性を発揮するものである。ピアジェはその『知能の誕生』(25)の中で赤ん坊が同化と調節によって対象世界の図式を作り出していくさまを詳細に報告している。またケーラーによれば(26)、動物も問題状況に置かれるとき、従来の行動とは異なった新しい行動を発明するという。ケーラーのチンパンジーたちは行き当たりばったりに解決に到達したのではなく、明らかに何らかの「洞察」に基づいて行動しているように見える。このことを先の三項態的記号過程の用語で言うならば、新しい図式としての媒介者Mの創出と見ることもできよう。しかし、動物たちの創意なるものは、基本的に欲望に従属したものである。彼らの中でわずかに開かれた記号過程の輪は開かれたと思ったそのとき、欲望という重りによってただちに閉じられてしまう。

9. ベルクソンにおいて、失語は聴覚的言語の失認という観点から考察されていた。しかしながらこうした視点の設定は一面正当ではあるが、まだ何か不十分な感じが残る。語にしても文にしても、確かに視覚的聴覚的対象であることは間違いないのだが、それでも言葉というものは単なる知覚対象以上の何かであるはずだ、という感じである。語音は確かに類的なものである（「おはよう」は、男の声で発音されようが女の声で発音されようが同じ）としても、現実化された当のものにおいて見いだされるのは所詮、音である。音声の形態を自由に組み替えるという能力自体は、人間と猿の脳の「本性的差異」(27)の産物なのだろうが、音声は外的事物を動かす物理的エネルギーとしては限りなく「無効なもの」である。それでは、進化の過程において脳実質の劇的な変化すら伴いながら発生した、この「無効なもの」の働きは何か。

ベルクソンの言語観について語らなければならない。しかし、彼が言語について言及している箇所は少ない。主題的言及を『創造的進化』（以下『進化』と略記）に見いだすことができる。彼はそこで、人間の用いる記号と、昆虫の用いる記号との比較を試みている。彼によれば、昆虫の記号は対象に固着しているが、それに対して人間の記号は対象との結びつきに関してまったく恣意的である。「記号が或る対象から他の対象へ移転するというこの傾向は、人間的言語の特徴である」(28)と彼は言う。人間において記号は特定対象の束縛を離脱し、「何かが何かを指示しうる(N'importe quoi peut d signer n'importe quoi.)」(29)というまったく形式的な外枠を残すのみとなった。そして記号と対象とのそのような極めて緩い結びつきは、外界の事物にとらわれていた知性の目を内面に向けさせることを可能にした。ベルクソンによれば、言語によって反省は可能になったということになる。

ベルクソンは「私の言う直観とは反省なのである」(30)と言っている。もしそうだとしたら、直観は言語によって可能になったということになるだろう。したがって、直観を言語に対立するものとして捉える理解は端的に間違いであるということになろう。『入門』の記述がどうであれ、直観と言語との間には、こうした表裏一体の関係がある。そしてこ

の関係は、美の経験に関してカントが示したことに似ている。美の経験において悟性と構想力とは自由に戯れる。そしてこの両力の調和は美の経験のみならず、認識一般を可能にするものであった(31)。『入門』において概念から直観には行けないが、直観から概念には行けるとしたことも、反省的判断力の働きを思わせる。直観の無媒介性は、すべての媒介の拒絶ではなく、予めのカテゴリーをもたない悟性がそれでもなお不定の概念の場所であり続けるのと同様な意味でそうなのである。『入門』で言われたように、直観は言語を超えている。しかし、その場合の「超えている」という意味は、あらゆる記号化に中立的に開かれているので、直観それ自身は特定の記号組織に依存する必要はないということなのだ。

語と指示対象との間の無限の恣意性は、外的対象に見とれていた知性の目を内側に向かって転回させる。語はある知覚対象から他の知覚対象に広がる。また知覚対象からこの事物の記憶に、記憶からとりとめのないイマージュへ、最後にはイマージュを表象する働きそのものの表象、知性の諸々の操作(operations)の表象すなわち観念へと広がっていく(32)。「魂の盲目の機能」が生み出す「感性的概念」(33)、身体に埋没した図式は、このように名を与えられて対象化され、相対的独立性を獲得し、より緻密な開発を受ける。そしてついには知覚対象との接点を特に指定しない自己完結的な操作体系にまで仕上げられることもあるだろう。

10. 運動図式による媒介に関して私は、A—M—V連関について言及した。A—M—Vの媒介者Mは身体と事物との間で確定された意味を示している。対象は最初、「食べられるもの、つかめるもの…」という生命的な意味（M）を荷なっていたはずである。ところが有節言語という現実に至って、Mは身体的束縛を超越する。それにしたがってAもVもその領域を拡大する。言語によって三項態的記号過程のもつ媒介者の契機が目に見えるもの、操作可能なものになることによってA、M、Vすべての領野が無制限に解放される（もちろんこれは権利上のことである。アインシュタインの

特殊相対性理論が示したように、光速を超えて物質的作用は伝わらないという現実的な制限等が事実上、無制限性に枠を与えることになる)。もちろん記号過程が走る系列はA—M—Vにとどまらない。A—M—AないしV—M—Vの系列も存在するだろう。記号過程はこれらのさまざまな系列を走る。そしてそれによってさまざまな媒介者を生み出していく。

狭い範囲で実現されたA—M—A系列は、例えば自転車に乗る場合であろう。われわれはさまざまに異なった自転車を乗りこなすことができる。それぞれに差異をもつ諸対象に無区別に語が適用されるように、生きた記号である身体はそれぞれに差異をもつ自転車に無区別に適用される。このとき媒介者として機能しているのが自転車に乗る運動図式である。

しかし、記号過程的解放の後では、AとAとがもっと長い、遠い媒介の輪によって結びつけられることも可能になる。このことがもっとも高度な形で見て取れるのが、仮説発想的推論(アブダクション)の場合であろう。Aから、媒介者Mに、すなわち仮説に飛躍し、その仮説からテスト含意を引き出すことによってもう一度Aに帰ってくる。その媒介者Mは身体的な類似・隣接を超えていると言ってもなお類似や隣接に導かれることもあるだろうし、隣接も類似もしていないもの同士が、媒介者Mによって関連づけられることもあるだろう。また媒介者Mは全面的に解放されているのであるから、空想的とも言えるような想念と結びつきつつ、仮説が発想されることすらあるだろう。

ベルクソンはあの有名な平面上に倒立する逆円錐の図形を示しながら、精神を定義して次のように言っている。「精神とは、その二つの極限、すなわち行動の平面と夢想の平面との中間領域を、たえず貫いて走るものである」(34)。つまりわれわれは顕在的なものと潜在的なものの間に発生するさまざまな距離を生きることができる。身体は逆円錐の頂点に位置し、狭い範囲の顕在—潜在連関を発生させる媒介者であり、精神は実利を超えて自由に顕在—潜在連関を発生させる媒介者である。両者とも記号過程的三項態という存在様態は同じなのだ。そもそも心身の統合の事実そのものを否

定する人はない。しかし、問題はそれらに割り当てられる存在論的カテゴリーから生ずる。しかし、われわれは両者に対して、記号過程的三項態という同一の存在様態を見るのであるから、ここにおいて心身の問題は消失した。

精神の示す顕在—潜在連関の自由な戯れを、われわれは高度に発達した記号組織を作り出す推論作用において見ることができるだろう。その意味で、アブダクション、ディダクション、インダクションは回転しながら世界を堀すすむ掘削機の三つの刃のようなものだと言えよう。三つの掘削の刃が顕在的なものの領域に向けられるとき、顕在的なもの、例えば物質のカテゴリーが沈殿する。ある場合にはこれは、生命が進化の過程の中で克服してしまった物質性を、身体が日常的物体との相互作用の中でいわば「想起」するという仕方で行なわれることもあるだろう。A—M—Aの連関を走る記号過程によって生み出されるカテゴリーはそれが示す、自然支配の有効性から注目を浴びやすい。そして、ベルクソンによる空間化批判は、こうしたカテゴリーを精神に対して適用することに対する警戒を示すものでもあった。それでは精神のカテゴリーはどのように探究されるか。それはどのようなものなのか。この問いは、ベルクソンが未決のまま放置した領域、個人的意識と生命との間に分厚く堆積した地層、意識の光が届きにくい昏迷の領域の調査を要求しているように見えるが、これはここでの議論を超えた話題であろう。

11. 有節言語によって全面的解放へともたらされた記号過程において、記号表示するものと記号表示されるものは、もはや言葉である必要もなくなる。体験的世界はイギリス経験論の哲学者たちが言うように、隣接性、類似性によって織りあげられているが、隣接性、類似性もいまや記号過程の中に取り込まれて、それぞれ、インデックス、イコンという、記号過程のモメントへと昇華される。ここにおいてもはや言葉と物が連関しあうのではなく、記号と記号が連関しあう事態に至るのである。

逆説的なことではあるが、同様のことが今度は有節言語それ自体に対して生ずる。いったん広大な記号過程の領野が

開かれた後では、有節言語は今度は数ある記号組織の一つに、記号過程の海に浮かぶ一つの浮島に過ぎなくなる。芸術活動を考えてみればそれは明らかであろう。「言葉を持つ動物」というのが伝統的な「人間の定義」であったが、どうやら自然の意図はそれ以上のところにあったようである。有機的身体から有節言語へ向かう、記号過程の解放という方向は見て取れた。しかし、言語すら超えていく記号過程が最終的に何を目指し何を実現しようとしているのかを先取り的に言うことはできないし、その必要もないであろう。しかし、記号過程の中にみずから飛び込み、記号過程としての生を全うするとき、その答えを「鏡によって謎の中で」(35)見るのかも知れない。

〈注〉

(1)中央公論社『世界の名著・アウグスチヌス』山田晶訳『告白』第十巻第十六章25 p.351-2.

(2)H.Bergson., Oeuvres,p.67.PUF(以下書名とページ数のみを記す)[白水社『ベルグソン全集1』p.96.PUF, Oeuvres,p.67]

(3)Oeuvres,p.68.[白水社『ベルグソン全集1』p.97.PUF, Oeuvres,p.68]

(4)I.Kant.,Kritik der reinen Vernunft(Philosophische Bibliothek版)Bxxx.(以下書名とページ数のみを記す)[岩波書店『カント全集第4巻』有福孝岳訳(以下『岩波カント全集第〜巻』とのみ記す)、p.43]

(5)Oeuvres,p.341.[白水社『物質と記憶』田島節夫訳(以下『物質と記憶』とのみ記す)p.230]

(6)Oeuvres,p.1396.[中央公論社『世界の名著・ベルグソン』坂田徳男訳『形而上学入門』p.68-9]

(7)Oeuvres,p.1397.[中央公論社『世界の名著・ベルグソン』坂田徳男訳、『形而上学入門』p.70]

(8)Oeuvres,p.354.[『物質と記憶』p.246]

(9)大意であり、そのままの引用ではない。Kritik der reinen Vernunft(Philosophische Bibliothek版)A78,B103.[『岩波カント全集第4巻』p.154]

⑽作品社『精神現象学』ヘーゲル著 長谷川宏訳 p.121.

⑾例えば、過去と潜在との用語上の結びつきは、『物質と記憶』p.153. Oeuvres,p.278において、現在と顕在の用語上の結びつきは、『物質と記憶』p.159.Oeuvres,p.283に見ることができる。

⑿Houser and Kloesel,The essential Peirce,Vol (1867-1893),p.11-27,Indiana

⒀岩波書店『プラトン全集第11巻』『国家』藤沢令夫訳 p.131 368D

⒁Oeuvres,p.235.[『物質と記憶』p.104]

⒂Oeuvres,p.253.[『物質と記憶』p.125]

⒃Oeuvres,p.255.[『物質と記憶』p.127]

⒄Oeuvres,p.255.[『物質と記憶』p.126]

⒅Oeuvres,p.259.[『物質と記憶』p.131]

⒆Oeuvres,p.256.[『物質と記憶』p.128]

⒇Oeuvres,p.256.[『物質と記憶』p.128]

(21)Oeuvres,p.256.[『物質と記憶』p.128]

(22)Oeuvres,p.256.[『物質と記憶』p.128]

(23)Oeuvres,p.299.[『物質と記憶』p.179]

(24)Oeuvres,p.300.[『物質と記憶』p.181]

(25)ミネルヴァ書房『知能の誕生』J・ピアジェ著、谷村・浜田訳、

(26)岩波書店『類人猿の知恵試験』ケーラー著、宮孝一訳

(27)Oeuvres,p.718.[白水社『ベルグソン全集第4巻』松浪・高橋訳 p.298]

(28)Oeuvres,p.629.[『ベルグソン全集第4巻』p.184]

(29) Oeuvres,p.629.[『ベルグゾン全集第4巻』p.184]
(30) Oeuvres,p.1328.[『ベルグゾン全集第7巻』p.104]
(31) Kritik der Urteilskraft, V143(Philosophische Bibliothek版)[『岩波カント全集第8巻』牧野英二訳 p.179]
(32) Oeuvres,p.630.[『ベルグゾン全集第4巻』p.185]
(33) Kritik der reinen Vernunft(Philosophische Bibliothek版),A146,B186[『岩波カント全集4』p.248]
(34) Oeuvres,p.311.[『物質と記憶』p.194]
(35) 教文館『ギリシア語新約聖書6』,『コリント人への第一の手紙』13.12

＜参考文献＞

※直接関係あるもののみ記す。
白水社『ベルグゾン全集』
岩波書店『カント全集第4、5、8、9巻』
中央公論社『世界の名著・アウグスチヌス』
作品社『精神現象学』ヘーゲル著 長谷川宏訳
ミネルヴァ書房『知能の誕生』J・ピアジェ著 谷村・浜田訳
岩波書店『類人猿の知恵試験』ケーラー著 宮孝一訳
教文館『ギリシア語新約聖書6』
岩波書店 プラトン全集第11巻

Memory and Intuition

— About the hidden "logic" in the philosophy of H.Bergson —

Shigeyuki Kawabata

It is common knowledge among philosophical researchers that modern philosophy began with Descartes's "cogito". And there might be no objection to calling modern philisophy "philosophy of self-consciousness". H.Bergson found his philosophical starting-point in immediate self-knowledge, "durée pure". As such we can say that his philosophy belongs to the ancestry of self-consciousness philosophy. If so, a problem will arise. :What is his own contribution to philosophy ?

I found an answer by interpreting and extending the concept of "schème moteur" which is found in his second main book, "Matter and Memory".The answer is a tri-structure which is composed of three moments, "actual", "virtual", and "medium". I propose to regard this structure as the archetype of signification, moreover, to extend it to the ontological principle. And I call this the "semiotic process".

My intention is to give some logical form to Bergson's idea which some people often criticize as just being a metaphor. In this sense I think it can be said that "semiotic process" is another name for " élan vital". The making Bergson's "hidden logic" clearer by finding out the "semitic process" is the main theme of this paper.